

「田助手」。「たすけて」と読む。水俣市久木野のむらおし施設「愛林館」は、耕作断念で荒れた棚田をよみがえらせようと、草を刈り、復田を目指す。そのボランティアが田助手だ。昔、人々が懸命に開いた棚田の悲劇のような響きもある。田助手に参加した。(松岡 茂)

ウィーン。クイーン。

あとちで、草刈り機の音がうなる。操作法を習い、一台を肩から掛ける。重さは六、七キロ。エンジンをはかば、草を刈っていく。何となく「パワー」がない。

「刃の回転音を聞け」と教えられる。思い切つてエンジンの回転を上上げる。少し遅れて、シューンと刃先が空気を切る音。怖い。しかし、これでもエンジンズに知れるようになる。

水俣川の支流、久木野川の源流部。石積みで棚田が何枚にも重なる。愛林館館長の沢畑さん(左)は「日本一の棚田」と自慢する。ただ、一枚一枚は狭く、大型機械は導入できない。今のコメの値段では、稲作だけでは維持は難しい。条件が厳しい上流部ほど荒れた田が増える。沢畑さんらはボランティアを募り、こうして田の草

棚田を守る

くまもと

現場

水俣市久木野 ボランティア「田助手」

草刈り機で荒れ地と格闘



▲草を刈る田助手のボランティア。背丈以上に伸びたカヤの大株などと格闘する＝水俣市の久木野川上流

▲久木野川上流にある、石積みの棚田。上流部へ行くほど、耕作を断念した水田が増える

を刈り、大豆や米を植えている。「兼農家が『荒らすまい』と必死に守っているのが棚田。周辺に耕作断田が迫れば、うちも限界と連鎖しかねない。田助手は、頑張っている農家へ応援メッセージ」と沢畑さん。

さん(右五人)。長く放置された田には、背丈以上のカヤの大株、ノイバラ、クヌギなど生える。インシがクヌギの根を掘ったのが、大きな穴もそこそこある。草刈り機は「腰を使って刈れ」と教えられたが、つい腕で動かしてしまっ。全身から汗が噴き出す。疲れが来る。

夕食。疲れが心地よそう染顔が並ぶ。テールにはとれたての野菜。山の幸、不知火海の幸。現在の部品のよくなった労働とは違う満足感がある。おしと一緒には体に入ります。同時に、棚田を守るごいから大変かも。

「ひとまず神奈川県へ帰るといふ小坂さんの送別会も兼ねていました。その後は早稲で収穫を完了。九州には年滞在で農業、林業などを体験した。「自然向きな誇り、強さを知った。伝統的文化、景観を伝ち、新しい時代

この日の参加は横浜市の元会社員、追分勇さん(左)、大分・由布市元竹細工をつくる伊藤明彦さん(右)。神奈川県出身の小坂純也

さん(右五人)。長く放置された田には、背丈以上のカヤの大株、ノイバラ、クヌギなど生える。インシがクヌギの根を掘ったのが、大きな穴もそこそこある。草刈り機は「腰を使って刈れ」と教えられたが、つい腕で動かしてしまっ。全身から汗が噴き出す。疲れが来る。

夕食。疲れが心地よそう染顔が並ぶ。テールにはとれたての野菜。山の幸、不知火海の幸。現在の部品のよくなった労働とは違う満足感がある。おしと一緒には体に入ります。同時に、棚田を守るごいから大変かも。

「ひとまず神奈川県へ帰るといふ小坂さんの送別会も兼ねていました。その後は早稲で収穫を完了。九州には年滞在で農業、林業などを体験した。「自然向きな誇り、強さを知った。伝統的文化、景観を伝ち、新しい時代

代びて対応していくか、自分の課題」といふ。感が深い。「自然相手の驚異を感じる。体もよくなる。各地の農作業ボランティアにも参加する。

今の時代、棚田の稲作で元ほどの収入になるのか。仮に、一反(約千平方メートル)の田六枚を耕作するとする。収穫は反当たり八俵とすると四十八俵、一俵一万二千円で五十七万円、機代、肥料代、労働代などを引くと、ほとんど手元には残らない。「もうつらな、もうつらな」と判断したら、中山間地は荒れてしまふ。棚田や森には、国土を守る。水を育む、物を育てるなど多面的な機能がある。そこを守ると、農家に現金を交付する「直接支払制度」が平成十二年度から始まっている。

県内では千二百八十協定集落)が交付対象で、交付総額は約千三億円。協定に参加する農家は約三千四百戸で、一世帯当たりの交付額は約六万八千円(平成十九年度、約半分は集落の共同利用で、農家への交付は三万円ほど)だ。

「棚田や森の意は、多くの人が受けている。それを当たり前のように思っている。しかし、現場では、相当の労力をかけている。もうさき、何らかの形を授けたい。もうさき、何らかの形を授けたい。もうさき、何らかの形を授けたい」と沢畑さんは言う。